文献レビューの書き方③

ー文献レビューもコミュニケーションー

最終回は、文献レビューもコミュニケーションというタイトルを立てました。この依頼をいただいたときに、ぜひみなさまにお伝えしたいと思ったことです。

自分の研究を学会や研究会、学生の方であれば大学の授業やゼミ内で発表することで、研究が大きく進むきっかけとなります。直接仲間と会って交流（コミュニケーション）する機会は、モチベーション維持のためにも欠かせません。また、研究テーマが明確になり、研究を実施するとなると、調査協力者とのさまざまな調整も必要になります。このように、研究活動は自分一人では成り立たず、つねにコミュニケーションがあることは、みなさんご存じの通りです。

文献レビューも例外ではありません。文献レビューは、レビューの書き方①、②で述べてきたとおり、基本的には地味で孤独な作業のように思われがちです。しかし、先行研究と時間や空間を超えて出会い、対話するワクワクがあります。先行研究のつながりと蓄積を理解することで、自分の研究テーマの社会的意義や学術的意義が明確になります。働くうえでコミュニケーション力が必要だとさかんにいわれますが、大きな声でアピールする力だけでなく、目立たないけれども、地道に論文を読み、じっくり考える（＝相手が伝えたいことを「理解する」）ことは、今までもこれからも、必要なコミュニケーション力のひとつではないかと思います。

また、投稿論文には展望論文というカテゴリーもありますので、ぜひレビュー論文を投稿してみてください。私は、論文を投稿するプロセスで、査読の先生方に、たくさんの励ましとご指導をいただきました。第一線で活躍されている査読の先生方の指摘に答える作業はほんとうに骨が折れます。しかし、査読の先生方も貴重な研究時間を使って、投稿論文に向き合ってくれます（若松先生の「良い実践研究論文を書いていただくために」の回を参照下さい）。何度も何度も繰り返すことで、読みやすい論文に仕上がっていきます。ストックノートをまとめる作業が相手を理解するコミュニケーションだとすると、論文にまとめ、その成果を届ける投稿プロセスは、自分の考えを「伝える」コミュニケーションです。

ところで、ライフサイクルの中で研究の為に自由に動くことがままならない状況があります。例えば、仕事など研究活動以外の負担が大きい時期、子育てや介護など家族のケア役割を大きく求められる時期、体調が優れない時期などです。「伝える」コミュニケーションができない時、先行研究を読める範囲で読み、考え続けた「理解する」コミュニケーションの時期が、現在の自分を支えてくれているという経験があります。

文献レビューは、たいへん時間のかかる地味な作業ではありますが、その分野の研究を発展させる「種まき」であり、取り組む価値はあると思います。みなさんの文献レビューと出会える日を楽しみにしております。

（福島大学　富永美佐子）